



# モンゴルにおける福音派の事例を通して見えてくるもの

著者	滝澤 克彦
雑誌名	東北宗教学
巻	11
ページ	101-108
発行年	2015-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00123186">http://hdl.handle.net/10097/00123186</a>

## モンゴルにおける福音派の事例を通して見えてくるもの

滝澤 克彦

研究という営みのなかで、自分がこれまで辿ってきた道筋を振り返るということは、いうまでもなく重要な位置を占めている。それは、研究活動にとどまらず、例えば教育の場面でも、学生を指導しつつ自らの過去を重ね合わせることはしばしばであるし、それが翻って今の研究に大きな刺激を与えてくることが多い。そして、自身の研究そのものについて語ったり記したりすることも、まったく違った角度から自らの軌跡を振り返る貴重な機会である。それは、自分の人生全体のなかに研究を捉え直してみることでもあり、とりわけ宗教学のような学問における意義は大きいだろう。そのような意味で、このように「自著を語る」機会を与えていただけたことに感謝したい。

『越境する宗教 モンゴルの福音派——ポスト社会主義モンゴルにおける宗教復興と福音派キリスト教の台頭』（新泉社、2015年）は、2008年に東北大学に提出した学位論文をもとにした初めての単著である。本書では、モンゴルにおける現代の宗教状況を、特に福音派キリスト教の台頭という現象に焦点を当て、ポスト社会主義という文脈で読み解こうとした。以下では、本書の内容の一部を紹介しながら、私が研究対象としているものの宗教学的な意味について、改めて問い直してみたい。

### ポスト社会主義モンゴルにおける福音派の台頭

冷戦終結にともなう社会主義体制の崩壊によって、モンゴル国にいわゆる「宗教復興」が起こった。仏教やシャマニズムなど既存宗教の復興のかたわらで、新宗教を含めた多くの外国宗教が流入してきた。そのなかでも福音派キリスト

教は最大の勢力であり、現在、教会数は600を越え、信徒数は8から9万人ほどに達したと言われている。これはモンゴルの人口のおよそ3パーセントに該当する。社会主義時代、キリスト教徒がほぼいなかったことを考えると、民主化後25年のあいだのこの増加は驚くべきである。本書では、なぜ「モンゴル」で「キリスト教」なのかという素朴な問いを出発点に、現代モンゴルにおける宗教状況の分析を試みている。

民主化後、仏教は民族主義の一つの象徴として掲げられることになる。そこで、外来宗教は「非伝統的宗教」のレッテルを貼られ、警戒感をともなった民族主義的批判の対象となってきた。しかし、福音派は、自らその信仰を「宗教ではない」と規定することで、「伝統的宗教」と「非伝統的宗教」の対立をかわしてきた。そこでは、第一に「宗教」をいかに乗り越えるかという点に重きが置かれる。そのとき、仏教的な起源をもちつつ社会主義の記憶を刻み込んだ、この「宗教」という概念が、極めて大きな意味をもつことになった。例えば、家庭において続けられてきた習慣的祭祀が、福音派の教えと相容れるものなのかどうかという判断も、それが「宗教」であるのかどうかという基準に照らされていくことになる。それが「宗教」ではなく「伝統」であるということで、福音派の信仰と共存する場合もある。このように、福音派の信仰は、「宗教」と切り離されることによって、新たな形で民族主義やモンゴルの「伝統」と結びついていく道を切り開いた。

仏教のような「宗教」を蒙昧で迷信的なものとし、それを乗り越えて「新しい人間」として生まれ変わるという感覚は、どこか社会主義の言説と重なり合い既視感を覚えさせる。しかし、福音派への改宗は、あくまで現在のモンゴルにあって、様々な問題や苦難を乗り越えるものとして捉えられている。現状を打破しようとする原動力は、「神との直接的な関係性」としての「信仰」に求められる。これは、極めて個人主義的な性格をもち、場合によっては家庭や親族などの人間関係よりも優先される。一方で、そのような個人主義的信仰は、信徒を「教会」という新たな共同性へと導いていく。その共同性で大きな役割を演じるのが、教会が行なう援助活動である。

教会は、経済的支援や医療サービスなど様々な援助活動を行なっている。このような活動は、福音派が、「実利的な関心であって、本当の信仰ではない」と批判される原因ともなっている。しかし、実際の彼らの信仰においては、この「実利的な関心」と「本当の信仰」は密接に結びついており、決して単純に対立するものではない。つまり、彼らの抱える様々な問題が教会の援助も含めた様々な形で解決したとき、それは「救い」として認識され、より信仰を深めていく契機となる。そして、そのような体験は、「祈りの集会」や「証し」によって信徒たちに共有されていくのである。教会は、このようにして信徒のあいだに独特の「救いの共同性」を生んでいる。

このように、福音派は、神と個人の直接的な関係性という他の「宗教」には見られない極めて個人主義的な「信仰」の上に、「救いの共同性」を築き上げている。しかも、その共同性は、グローバルな福音派のネットワークへと接続する。人びとを強力に個別化していくとともに、グローバルな広がりでも互いを結び合せていく福音派の社会的特性は、国内／国際移動や失業など様々な理由で孤立する人びとも強く引きつけている。

## モンゴル研究にとっての福音派

以上が本書のおおまかな内容であるが、それにしても、「モンゴルの福音派」という現象は、「モンゴル」を語るうえでも、あるいは「宗教」を語るうえでも、極めてマイナーな対象である。それにもかかわらず、それを研究対象とすることには、いったいどのような意味があるのだろうか。

モンゴル研究という観点からは、福音派をとりあげる意味は、必ずしも小さくはない。一般に、モンゴルの宗教といえば、仏教やシャマニズムが思い浮かべられるが、民主化後25年のあいだの福音派の伸張は、明らかに現代モンゴルの宗教状況を象徴する出来事である。しかし、この現象は、モンゴル国内外において、ほとんど研究の価値ある対象として扱われてこなかった。

モンゴル国内においては、キリスト教という外国宗教の拡大が驚きをもって認知されながらも、民族主義を背景とした警戒感が先立ち、しばしば明らかな

敵意が向けられてきた。あるいは、そうでない場合であっても、キリスト教は「人びとの実利的な関心に訴えたものであって、本当の信仰ではない。社会主義崩壊後の混乱につけ込んだ一時的なものである」というラベリングによって、人びとはその理解しがたい現象を度外視しようとしてきた。にもかかわらず、「一時的」な状況はいまだ継続し、その間にも福音派はむしろ勢いを増し続けている。モンゴルの学界はこの現象を捉えあぐねており、キリスト教の社会的存在意義をどう評価すべきか、それは有害なのか有益なのか、という議論に終始しているのが実情である。

一方、モンゴル国外の研究者には、わざわざモンゴルにまで来て「キリスト教」の研究をしようという者はほとんどいない。彼らの多くが好むのは、シャAMANISMや遊牧民である。おそらく、キリスト教は、「モンゴル」を研究する上でまだまだマイナーな対象であるというだけではなく、「モンゴル」というイメージの輪郭からはみ出してしまう特徴があるからではないか。実際、福音派信徒は、モンゴル人のステレオタイプが当てはまらないことが多い。卑近な例を挙げれば、モンゴル人は豪快にウォッカを飲み、酔っ払っては大声で歌い、派手に喧嘩をするもので、フィールドワーカーは、彼らとうち溶けるために、一緒に飲んで歌い、酔い明かさなければならない。しかし、そのようなイメージは福音派信徒には当てはまらない。彼らはほとんど酒を飲まないからだ。他の多くの点においても、モンゴルのキリスト教は、「モンゴル」という枠を当てはめようとすれば、そこから染み出ていくノイズのようなものとして存在している。

多くの研究者が忌避するこのような福音派の捉えどころのなさ、モンゴル研究にとってそれが特殊で周縁的なものであることを意味するものではない。確かに、それはモンゴルの「本質」を描き出すようなものではないかもしれない。しかし、民族主義をめぐる国家と宗教の関係、家庭における「伝統」と信仰の葛藤、移民社会における信仰にもとづく共同体形成など、キリスト教を取りまく動きは、むしろ現在と過去が交錯し合うモンゴルの複雑な状況を象徴的に映し出しているのである。

## 宗教学にとってのモンゴルの福音派―「宗教」と「越境」

一方で、モンゴルの福音派台頭という現象は、宗教学にとってはどのような意味をもつだろうか。それは、一見、モンゴル研究におけるよりも、さらに限定的な意味しかもたないように思われるかもしれない。モンゴルという小さな国の、さらに些細な福音派という対象を通して、モンゴルの話ならともかく、現代世界における宗教を理解するための重要な示唆など得ることができるのだろうか。

しかしながら、本書は、宗教学的にもこの現象が重要な意味をもつことを示そうとしてきた。それは、第一に、ポスト社会主義という視角を通して、宗教概念をめぐる問題に対する一定の捉え方を提示できるからである。

社会主義は、「宗教」に関する一つの歴史的実験としての側面をもっていた。特に、モンゴルのような非キリスト教社会においては、「宗教」という概念そのものが社会主義の反宗教政策を通して作り上げられてきたのである。このような歴史の検証は、「宗教」が社会において重要な役割を演じている現代世界を論じる上で、極めて意義深いものであるはずである。しかしながら、社会主義による近代化と「宗教」をめぐる歴史的実験の帰結については、いまだ十分に吟味されてきたとは言いがたい。せいぜい、東側の敗北という事実が「世俗化論」への反駁と受け止められたぐらいで、「ポスト社会主義」という言葉自体さえ、もはや賞味期限切れのものとして忘れ去られようとしている。しかし、「ポスト社会主義」の意義は、はたしてそれだけで済まされてしまうものなのだろうか。

モンゴルにおける福音派の台頭は、まさに「ポスト社会主義」という文脈で捉えられる現象である。その信仰は、社会主義の記憶を一つの土台にしながら、人びとがあらたな社会状況を受け入れるなかで拡大してきた。彼らが、自らの信仰を「宗教ではない」と主張するとき、この宗教概念にはまさに社会主義の歴史が刻み込まれている。また、「伝統」としての家庭内祭祀とキリスト教の信仰をめぐる葛藤の根底には、彼らの体に刻み込まれた社会主義の歴史がある。つまり、モンゴルの福音派の事例は、それがまさに、近代化と宗教をめぐる社

会主義の実験の一つの帰結であることを表している。

「宗教」という概念がアカデミズムや植民地の言説によって、どのように権力と結びつけられ構築されてきたかという問題については、近代的な諸概念をめぐる脱構築の流れのなかで批判が重ねられてきた。しかし、そのような宗教概念が、それを取り巻く実践や社会関係と結びつき、現実になどのように作用しているかという問題については、十分に議論されているとは思えない。宗教学的的存在論を認識論的に批判し、歴史的あるいは政治的文脈から「解釈」することで「批判」したつもりになるだけでは不十分であろう。

一方で、冷戦後の社会情勢のなかで、様々な形で「宗教」が顕在化し、その公共圏における役割への期待が高まっているが、このような存在論では、逆に宗教概念批判の視座が生かされていない。

このような宗教学上の乖離を結び合わせるためには、認識論としての宗教概念を改めて存在論的地平へ捉えなおす必要性がある。そのために、「宗教」をめぐる歴史的実験の帰結としてのモンゴルの福音派が、示唆的な事例になるのではないかというのが、本書の論点の一つである。

本書で意識したもう一つの論点は、現代世界の現象として漠然と捉えられている「宗教の越境」という問題を、より厳密に定位することである。この問題は、先ほどの概念の問題とも関連する。「宗教の越境」あるいは「越境する宗教」という言葉はしばしば用いられるが、それはかなり曖昧なイメージである。グローバル化によって様々な「宗教」が国境を越え、接触の機会が増すことで様々な問題が起きているという感覚は、現在多くの人が抱いているところであろう。しかし、それは、より細かく見ていけば一体どのような事態なのか。

本書では「宗教の越境」を、実体的なものではなく、開かれた問題群として捉えようとした。それは、より具体的に見ていけば、「宗教」を構成する様々なものが、国境だけではなく民族、社会集団、言語、世界観などの様々な境界を越えていく一連の過程である。そして、これら様々な過程は、互いにズレながら複雑に関わり合っている。本書では、このような多層的位相の関わり合いのなかに対象を捉えなおす方法を、一つの試論として福音派の事例を通じて示

そうとした。

重要なのはそのようなズレを認識することであり、それを一面的に捉えてしまうことは、実態を正しく反映しないだけでなく、一種の権力作用に無自覚に荷担してしまう危険性がある。例えば、モンゴルの福音派は、「非伝統的宗教」という民族主義的なラベリングに対して、「民族」と「宗教」という二つの位相における境界のズレに居場所を見つけ出してきた。そのようなズレを認識しないことは、そのあいだに働く力学さえもまた見落としてしまうことになるからである。

宗教概念と「宗教の越境」のいずれの問題も、「モンゴル」や「福音派」、「ポスト社会主義」など実体的なものとして他者化されかねない対象を、いかに他者化せずに存在論的に論じることができるかという課題と関わっている。研究者と対象の関係が非対称的であることは不可避的な前提だが、研究者自身のあり方とその権力の作用をどこに位置づけるかには、様々な方法が考えられる。自身と対象をつなぐ多層的な位相の交錯のなかにこの問題を捉えていくことが有効な手段ではないかというのが、本書の執筆を通して得られた展望である。

## 本書出版をめぐって

大変光栄なことに、本書は第37回サントリー学芸賞を頂くこととなった。それは、モンゴルの福音派というマイナーなテーマにもかかわらず、そこに込めた本書の意図を汲み取って頂き、そこに価値を認めて頂けたからだと考えている。そのことは、とても大きな自信となった。実を言えば、本稿の執筆はこの受賞を受けて依頼されたもので、少しでも参考になる話をということだったが、その点についてはあまり自信がない。この受賞は、私がモンゴルと出会い、福音派の方々との出会いがあり、導かれるように研究を続けてきた、その巡り合わせの一つであって、まさに私の能力や意志を超えたものだからだ。それでも、博論の出版を考えている若い研究者へ、僭越ながら少しでも参考になるならば、出版を通じて感じたところを記しておきたい。

いまや、宗教学などの分野で博論の出版は当たり前となっている。そのため



の出版助成は多数あり、10年ほど前と比べれば印刷費も安くなっているので、著者買い取りなどで被る負担もそれほど大きくはない。つまり、業績としての単著出版ということであれば、そこまで難しい話ではない。研究者としては、研究成果が公表された時点で仕事は終わりなので、その本が売れるかどうかは根本的には関係ない。出版社も助成である程度の収入が確保できる。しかし、本書の出版においてもっとも意義深かったのは、編集担当者が本気で売るつもりで携わってくれたことである。そして、それを通じて、「売れる」本を作るということが、研究の上でどれだけ重要かということを実感するに至った。

おそらく博論以外の本であれば、売れることを想定して執筆することは大きな問題ではない。しかし、専門分野の審査員が読むために書かれた博論は、それを売れるものとして想定すること自体非常に難しい。そのなかで、最初の原稿を渡したときに、担当者から「これなら、このぐらいの部数は売る」と明確な目標を示されたことは、とても幸いなことだった。こちらは、それに応えるように少しでも「売れる」ものに近づけようとした。担当者と、例えば「越える」か「超える」か、というような一箇所の単語をめぐる何度もメールの応酬をすることもあった。論文と市販本の書き方は、極めて異なる。論文がいかにも惰性的な思考で書かれているかということを痛感した。読者を想定しながら文章を改める作業は、それだけで、自分の思考の惰性に負荷をかけ、専門分野をはみ出て、その前提となる部分にメスを入れる作業に他ならなかった。もし、本書が博論とほぼ同じような形で世に出るようなことになっていれば、仮に宗教学としてすぐれた作品になっていたとしても、それ以上の実りは得られなかっただろう。

まさに担当者との共同作業を通じて、様々な研究上の発見があった。一方で、出版時には発行部数が当初より100部増、定価は600円減の税別2600円となり、より「売れる」本となった。いずれも、本書がこのような賞を頂けることになった大きな要因である。